

顕彰状

藪野健氏は、1943年9月1日愛知県名古屋市瑞穂区に生まれた。戦時中は愛知県中島郡に疎開、戦後市内に戻り空襲で廃墟と化した故郷に驚き、この幼年期の衝撃が氏の芸術の最初の原点となる。名古屋高等学校から早稲田大学第二文学部に進み、安藤更生、今井謙二、坂崎乙郎教授と出会い、在学中の1965年に第19回二紀展に初入選、1967年には紀伊國屋画廊で最初の個展を開催した。同年に第二文学部芸術学専修を卒業後、大学院文学研究科修士課程美術史専攻に進んだが、卒業論文は「アントニオ・ガウディ」（池原義郎教授、大沢武雄教授が指導）、修士論文は「ルドゥー、ルク、プレー—近代建築思潮考」（安藤更生教授、武基雄教授が指導）であった。

1970年から1971年まで、ピカソやダリも学んだマドリードの名門、サン・フェルナンド美術学校プロフェソラードに在学。美術館でベラスケス、ゴヤ、スルバランなどの作品に惹かれるとともに、スペイン内戦の記憶が残る街並みに犠牲となった詩人ロルカの面影を見出し、第二の原点となった。「廃墟が描くことの出発点であるとしたら、スペインで過ごした日々は、考え方や見方を根底から揺さぶったように思う」と、氏は後に述懐している。また、卒業論文と修士論文で建築史に取り組んだことが示唆するように、歴史への情念の昏さと記憶の深さを、日本や欧州の現実の都市のみならず、思念と感性の深淵から浮かび上がる幻想都市の建築的表象化を通じて探求することで、過去、現在、未来を重層的に表現する独自の画境を開いた。

主要な絵画展での受賞歴は、1969年の第23回二紀展奨励賞（「都市と夢」）を始め、昭和会展優秀賞（「小さい町」）、二紀会宮本賞（「建築家の部屋」）、二紀会菊華賞（「遠い日の僕の村」）、日本青年画家展優秀賞（「1936春 アラゴン」）、二紀展文部大臣賞（「時を刻み、又時が」）など枚挙にいとまがなく、2009年には「ある日アッシジの丘で」により日本藝術院賞を受賞、同年には日本藝術院会員に選出されている。現在は二紀会副理事長でもあり、まさにわが国洋画界の頂点に位置する存在と言えよう。

本学では芸術学校、理工学部等で教鞭を執られ、1999年から2010年は芸術学校空間映像科教授、2010年から2013年までは基幹理工学部表現工学科教授、さらに2011年から翌年にかけて會津八一記念博物館館長を歴任した。本学の創成期から現在に至るキャンパスの風景を、「藪野ブルー」と称される深い青空を背景として多数の作品に描き続けた氏は、在学生、校友にとって最も親しい画家となっており、主要な絵画やデッサンは学内各所に展示されている。また、2012年に早稲田大学大隈記念学術褒賞受賞、2014年に早稲田大学荣誉フェローの称号を授与されたことは記憶に新しい。

こうした藪野健氏の顕著な功績をたたえ、ここに早稲田大学芸術功労者として永くその栄誉を顕彰するものである。

2018年3月24日

早稲田大学